

転生してカリギュラに  
なったらかなりの魔改  
造されたカリギュラな  
んですが.....

リン・オルタナティブ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

フェネクスとカリギュラその他ガンダムを愛する少女、レインが神様の闊歩する荒廃した世界に降り立って魔改造済みカリギュラとなって暴れます。

ただそれだけさ！

# 目次

転生して飛びます！飛びます！	1
能力確認ですけど、何このハイスペック	4



転生して飛びます！飛びます！

………重い………辛い………痛い………。

昔二回ほど苦しめられた偏頭痛のような激痛に襲われて目を開けると……、

「………グルウ？」

見たこともないほどどす黒い煙の嵐が目の前に迫っていた。

………ちよいちよいちよい!?何がどうい風吹き回しでこうなった!?これ

「灰嵐」じゃん!

彼女の思考は高速で回転し、アドレナリンブシャー状態の彼女にとっては想定外の出  
来事で灰嵐はものすごい速度で迫ってくる。

「グルラアアア!?!」

有無を言わずに灰嵐は彼女を飲み込んだ。

◇

どれほどの時間がたったのだろうか、死んだかな、どうなったのかなと思って彼女は  
目を開けた。

「………グルルルウ………?」

水面に体を映すと、そこにはくすんだ金属質の装甲を装着した純白の体色のカリギュラの体に大部分が装甲に覆われたハンニバルに酷似した頭部。ブースターにも装甲が取り付けられ、隠し刃は通常のカリギュラのような訳のわからないアラガミだった。

「カリギュラ……だよね?なんかハンニバルとカリギュラを足して二で割ったような奴だなあ……あ、ここフェネクスみたい。かわいい!」

くるくると回りながら姿を確認すると、ブースターの上にかつて見たユニコーンガンダム三号機「フェネクス」のスタビライザーのついた白いアームドアーマーD Eに似た何かがついており、他にも太ももや二の腕、胸部にある訳が分からないコアから青い光が漏れていた。

「(い、一回飛んでみるか)」

いざ!初フライトへ!そんな期待を込め、そして、  
「……………どうやって飛ぶの?」

すぐに期待は打ち砕かれた。だが諦めないのは彼女のポリシーなのか。体を屈め、ブースターへオラクル細胞を溜めきると少しだけ吹かす。

「……………グルウ!」

少しだけ浮いたことにワクワクしつつ、

「(名前ないけど……ええいままよ!レイン。カリギュラ・アビス)……………」

グルルルルル<sup>まー</sup>オオオオウ<sup>す</sup>!!」

「そう咆哮し、一気にパワーを開放した

はずだったが、

「……（思ってたんとチガウ!!）」

ブースターではなく、アームドアーマーD.E.モドキのバーニアが吹き、一気に急上昇する。劇中で見たサイコフレームから発せられるような青いオーラで線を引きつつ流れ星のように飛んで行った。

ここに、フェネクスを愛しカリギュラを殺しすぎた元人間が  
神だらけの世界に転生した瞬間だった

## 能力確認ですけど、何このハイスペック!?

「(うへえ。気持ち悪い……)」

初のテイクオフから数日経ったある日。溶解したのか、今にも溶けて崩れそうなビル街をフラフラと歩いているのは、真つ白な体色に鈍い銀色の装甲を装着した、ハンニバルのようでカリギュラのような異形のアラガミ。

そのアラガミの背中にはカリギュラのブースターがあるが、その2つのブースターの上に、体色とほぼ同じ色で染められたシールドのようなモノが取り付けられていた。彼女の言葉を借りるなら、「アームドアーマーD Eモドキ」だろうか。

「(私が目覚めた時に、灰色の嵐が襲ってきたけど……)」

ある程度酔いが覚めて落ち着いたところで、そんなことを考え始めたが、思考停止していたからかまだ思考速度が遅いと感じる。

彼女はボーっとしていた頭を回すため、一先<sup>ひとま</sup>ず近くにあったビルへと飛び込む。

ビルの壁には穴が開いていたが、人間改めゴッドイーター達には死角になる位置であるため見つかることはない筈だ。

彼女は人間だった頃と同じように腰を下ろし、壁に背中を預けようとするが、ブース



ターとDEモドキに阻まれたため、背中を預けることを諦めた。

そして、先程まで考えていた灰色の嵐のことについて考え始めた。

ドス黒く灰色の嵐、そして先程自身が口走った灰嵐と言う言葉

それらをかけ合わせた結論から言ってしまうと……

「……………此処つて、<sup>ゴッドイーター</sup>G E 3の世界だよね？」

当たり前だが、彼女の頭ではそんな結論にしか辿り着かなかつた。

彼女がひよこつとビルの中から顔を出すと、下の地上では二足歩行で大きな尻尾をもつ小型のアラガミ十数頭を、オレンジ色で短冊のようなものを背中から何枚もマントのように生やした、虎のような容姿を持つ大型のアラガミが数頭で追いかけて回す光景が、目に映つた。

まさしく、弱肉強食をそのまま体现したような世界が、この<sup>ゴッドイーター</sup>G Eと言う世界だ。

「(まず最初に狩っておきたいアラガミと言えば……………)」

ビルに顔を引つ込めた彼女が思い浮かべたのは、第一に<sup>かんのうしゆ</sup>感應種を思い浮かべた。

何故に感應種なのか。それは、<sup>感應種</sup>かれらのみがかもつ感應能力が関係していた。

感應種のみがかもつ特異なこの能力は、周囲の偏食場パルスを歪め周囲のアラガミを自身の支配下に置いたり、オラクルを操作し不完全ながらもアラガミを形成したりと、他にも様々な能力があるが、共通する特徴にゴッドイーター達の持つ神機を使用できなく

すること、が挙げられる。

ゲームでは専ら無視されやすいこの設定だが、裏を返せば、感応種にさえなっていればゴッドイーター達の神機を使えなくして無力化、逃走するという少しセコい戦法が使えるのだ。汚い、さすが忍者汚い（忍者じゃないけど）。

「（そうと決まれば、早速動かないと）」

気づけばさっきの喧騒は嘘のように収まっていたため、彼女が再び顔を出してみると、そこには先程の虎のような大型アラガミが一匹取り残されていた。はぐれたか、置いて行かれたか。

「（そんなことはどうでもいい！行くぞお！）」

一匹だけなのは好都合。この体のスペックの確認とこの世界での戦闘知識の積み重ねの礎になってもらおう。

その意志が読み取れたのか、大型アラガミ——ヴァジュラは彼女を「獲物」と判断したらしく、大きな咆哮と共に彼女のところへ走る。

「（斬り捨て……）——グルオウ！」

何処かの時代劇の一言を言い——アラガミ語だが——ヴァジュラの猫パンチ（？）が炸裂する直前に両腕にある仕込み刃を展開しようとした直後、仕込み刃がクルツと180度回って曲刀シメタのような形状に変形してしまった。

これにはカリギュラハンター(笑)である彼女でさえ内心驚いた。だが今は戦闘中、そんな思考をする程彼女に余裕などはなかった。

背中のブースターを多少吹かして突進の軌道を変えてヴァジュラの腕を掻い潜り、右腕についているその曲刀状の仕込み刃を振り上げるように刃を振るった。

アクションゲームに自信のあつた彼女が振るった刃は唸りを上げてあつさりヴァジュラの首筋を捉え、勢いをそのまま維持しながら進み、次の瞬間、ザシユツと言うあの意味気持ちいい音が鳴った時には、ヴァジュラの首と胴体はおさらばしていた。

彼女が速度を落とす、後ろを振り返るよりも先にヴァジュラの胴体が倒れ、その次に頭がゴトンと音を立てそうな勢いで地面に落下した。



初めての狩りは大成功に終わったが、彼女は一つ言いたかった。

「……何このハイスペック」

空は飛べるわバツサリ斬れるわ仕込み刃は回転して剣になるわ、そして、  
 「(隠し腕標準装備とか、どんなロマンという浪漫を詰めたらこうなるのかなあ、私には理解できない)」

彼女は今、元いたビル街とは別のビル街を移動している。だが飛んではいけない。太腿にある――恐らく皆さんのトラウマでお馴染みハバキリ先輩のモノであろうスラス

ターユニットを稼働させ、ホバー移動の要領で移動していた。

さらに肩付近からはもう一对の腕が生え、その腕がヴァジュラの死体をガッチリと保持していた。はつきり言つて楽である。むしろその腕はどちらかと言えば人に近く、エヴァのような既視感を感じた。

元々彼女はガンダムやアーマード・コア等のロボットものはかなり好きで、それなりにプラモデルやそれに準ずる物を買って揃えていた。

中でも彼女のお気に入りには、機動戦士ガンダムNTに出てくる「ユニコーンガンダム3号機 フェエクス」、そしてアーマード・コアの顔たる存在「ホワイトグリント」である。

「……………つと、ここなら良いかな」

そんなことを思い出していると、家となる場所を探していたが、自身の条件に合う場所が見つかった。

そこは高いビルが幾つも立ち並ぶ場所で、彼女が目をつけたそのビルには穴がいくつが開いており、他のビルに支えられ、ある程度の傾斜で保たれている。且つ、建物に重なっているため、ゴッドイーター達の死角になっているというおまけ付きだ。

「よし、此処をキャンプ地とする」

某モンスターをハントするゲームのようなことを言いつつそのビルへと入ってヴァ

ジユラの死体を下ろすと、役目を終えたと判断したのか自動的に隠し腕は収納されてしまう。

彼女は不服に感じたが、千切って食べたヴァジユラの味にその感情は吹っ飛ばされてしまった。

「(旨ツツツツツツま!)」

口に放り込んだヴァジユラの肉は、霜降り肉の如く口の中であっさりと溶けてなくなってしまう。

初めて食べる味に彼女はヴァジユラの死体を貪り食べ始める。ふとガリツと氷を齧ったような感覚が口の中で感じると、彼女が食べていたヴァジユラの死体は、沼のように黒く染まった地面の中へと吸い込まれ、消えてしまった。

恐らくコアを食べてしまったのだろう。そう結論づけ、久々の食事を堪能した彼女だったが、こんなことを思った。

「(……頭、何処やったっけ?)」

◆◆◆

初めてアラガミを喰らったその日、彼女は夢を見た。まだ人間だった頃の夢だ。

行き交う人々の中、彼女は立っていた。

誰にも邪魔されず、誰にも気づかれぬ。

その時だ。後ろから視線を感じ、彼女は首を後ろへと向ける。そこには、もう一人の、  
彼女が――■■■■がそこにいた。

背丈や服装、髪型、果ては髪につけていた赤いピン留めを付けているため、間違いは  
ない筈。

だが、その少女は生前の彼女とは違い、髪の毛の色は色が抜けてしまったように白く、  
肌も青白い。その上顔は俯いて下がった前髪のせいで目元は見えず、口元しか見えてい  
ない。

ふと、少女の口元が歪んで笑みが浮かぶ。しかしその笑みは、純粋な子供がする無邪  
気な笑みではなく、狂人が浮かべる三日月のような笑みだった。

そして、彼女が目を覚ますと――、

――目の前では、両手に神機の捕食形態に類似した捕食機関を持ったアラガミが  
ひっくり返ったまま、ピクリと動かず、そのまま沈黙していた――。